

肝炎患者における退院に向けての生活指導

北6階病棟 発表者 唐 沢 有 子

古 畑 富貴子・藤 本 佳 子・藤 原 昭 子・倉 科 百合子
立 沢 とくゑ・相 沢 明 子・山 岸 一 子・西 尾 恒 子
野 田 典 江・丸 山 恵 子・福 島 恵美子・飯 森 繁 子
岩 垂 照 美・鎌 倉 八重子・田 中 恒 子・手 塚 敦 子

I はじめに

余儀なく入院生活をする方にとって、身体的、精神的、社会的問題は個人により異なります。疾患をもち、社会復帰するまでの期間に、自らが克服する過程において、私達の役割りとしての生活の援助に重点をおきました。

先年、安静が必要な肝炎の急性期の患者が、それを守ることができないことの多いということから、アンケートにより、問題点をあげ、生活指導のために、パンフレットの作成を試みました。このパンフレットを生活指導、退院指導に実際使用してみましたので、報告いたします。

II 研究方法

昭和51年9月から11月の間、北6病棟入院中の急性肝炎及び、慢性肝炎患者に対して、スタッフをグループに分け、各々の患者の生活上の問題点、パンフレットの使用方法を考え、全員が同一の方向で患者に接する。

毎日の看護記録及び、退院時の患者との話合いのなかで、パンフレットの効果及びパンフレットの問題点を探る。

例として事例2つをあげる。

事例1 患者紹介

患者 65才 女 急性肝炎

環境 家は農業、長男夫婦、孫2人の家族

入院期間 昭和51.8.4～51.10.7

問題点① 疾患及び入院生活に対する知識不足(安静がなぜ必要なのですかなどの発言あり)

対策と実際 パンフレットをもとに読み合い、内容の理解をたしかめながら、具体的な生活指導をすすめていく。

結果と考察 食事、安静、検査の各項のなかで、積極的に質問がだされた。パンフレットが、ガリ版刷りで、読みにくかったため、誤って理解しているところをなおすことができた。

問題点② Au抗原(+)のため感染防止が、必要である。

対策と実際 感染防止の対策をできる範囲で指導する。説明内容①からだの中にウィルスを持っている人は、献血や供血をしないこと。②傷や鼻出血は、できるだけ自分で手当てをし、手当てを受ける場合は、他人に血液がつかないようにする。③カミソリ、歯ブラシは専用にする。④孫に自分のはしで、物をとって与えたりしない。⑤盃のやりとりはしない。⑥排尿、排便後は、手をよく洗い、分泌物などは、すぐにトイレに捨てる。⑦医療機関にかかるときは、担当医師にそのことを告げる。

結果と考察 特に質問はなかったが、「大変な病気なのですね」と、自覚と不安をもつ。具体的実践を伴い、その都度、指導していく必要を感じる。

問題点③ 退院近く、日常生活に復帰するよう外泊するが、外泊後、倦怠感がみられる。

対策と実際 外泊中の生活状態及び、家族の理解度を把握する。(家は農家で果樹のかきいれ時であるため、家族の理解は充分あるが、自分から手伝いをしなければいけないような気持ちになったこと、面会人の応対に、一番疲労を感じたことがわかる)

結果と考察 家族との話し合いの必要性を感じる。自己管理するために、疲労度に関する判断のめやすを説明し、具体的に食後の休憩と午前中30分の臥床をすすめる。

事例2 患者紹介

患者 26才 ♀ 急性肝炎 医療従事者

環境 主人と子供1人

入院期間 昭和51.8.5～51.11.6

問題点① 慢性肝炎へ移行の心配がある。肝炎の基礎知識は、充分ある。

対策と実際 日常生活における具体的な退院指導を行い、慢性への移行を防止する。具体的な食事、安静、退院後の外来通院について、パンフレットにて説明し、不足分を補う。病院食の献立てを2週間分渡す。この際、安静との関係で、食事の用意に時間のかかるものをさけたり、一食から二食への用意へと除々に行うよう話し合う。安静に関しては、初めの1～2週間はできるだけ病院生活と同程度にするよう努力し、昼も臥床する時間をとって経過をみるようにする。

結果と考察 配偶者が、脂肪肝であるため、お互いに注意することを認識し、食生活改善の意欲をもつ。子供は昼間保育所に預け、午前中は、家庭内で少し動き、午後は臥床するようにする。と具体的な計画を自ら立てる。職場復帰に関しては、外来通院の中で決定することになる。

問題点② 他人への感染防止に関して(現在Au抗原(-)である)

対策と実際 同室患者(事例1の方)といっしょに説明する。

結果と考察 知識は充分あったが、自覚をさらに増す。

事例1、2に対する考察

1 入院の早期に、パンフレットを渡し説明することにより、入院生活のなかで、自ら学ぶことができる姿勢がみられた。

- 2 事例1、2は同室患者であったため、説明を共に行う機会がもて、またお互いに激励しあうことができた。
- 3 感染防止のために、入院時においては実際に行ったが、家庭内で、でき得ることに対する指導が不足した。感染源に対する研究、防止に対する策が、現在進められているなかで、どの程度のことを行えば良いかという判断が、看護婦のなかでできなかった。
- 4 パンフレットの食事に関しての項は、基礎となるべき事の記載はあるが、家庭で実行するための具体的なアドバイスに欠けたため、病院食の献立てなどを加え、説明に役立てた。

■ 考 察

患者と看護婦とのよいコミュニケーションを求め、退院に向けて、患者の自らの闘病意欲をますため、基礎的知識の提供のため、パンフレットを看護のなかで役立てることを試みて、援助のあり方を考えさせられました。これを役立てるためには、看護計画、カンファレンスを伴って、個々に対してひとつの方向を、看護婦一同があらためて認識しなければならないと思いました。

今後、これをもとに、他の慢性疾患等に関しても、生活指導のためのパンフレット使用を考えていきたいと思えます。

パンフレットに関しては、退院時に不安となる家庭生活のなかでの問題を解決できるよう、それにそった内容も加え、理解しやすくするために、次の事を考え、現在、小冊子としてまとめております。

- ① 問答式のもの加える。
- ② 絵の挿入。
- ③ 感染防止のための、具体的にできる点加える。
- ④ 食事の献立てなど、実行するための具体的なアドバイス加える。

最後に、御協力いただきました多くの皆様に感謝いたします。

参考文献は略させていただきます。